



と ある昼食会に出たら、食後のちよつとけだるい空気を払う感じで、

「年明け最初の集まりでもあるし、せつかくだから今年の抱負を言ってもらいましょう。」
と幹事氏が言った。「じゃあそこから順番に」と指名された人が幸いにもテーブルの向かい側だったので、少し時間が稼げた。つきあいの深淺はあるが、さほど気遣いのいらぬ人たちだったので、何を言おうかを考える前に、「そもそも新年だからと抱負をもつたことなどあったらどうか」と考え始めてしまった。抱負とは、こうなりたいたいという願望をちよつと具体化させた計画のようなものだから、目標ほど距離感はないが、あて、というほど近くもない。あれこれと探ってみたら、どうやらぼくは抱負などもつたことないぞ、という結論に至った。

「一年の計は元旦にあり」と世間では言うから、学級担任をしているときは、年明けの始業の日は、子どもたちに何やら書かせて掲示するというのを、したりしなかったりした。あまり徹底してしなかったのは、自分が年の初めだから抱負を抱く、という意識がなかったからである。自分が書かされる方だったら困るだろうな、という思いがあるから、となく後ろめたさも感じるし。では、そう思うならしなければいいの

だが、何となくみんなそうしている、とただ慣習に盲従してしまうのだから情けない。

一年の計を立てたことが一度だけある。どう考えてもその一度きりだ。小学校の三年生頃だったと思う。魚の食べ方が汚い、まだ食べられるところがたくさん骨の周りについているではないかと、食べる度に母親に罵られるのにうんざりして、魚をきれいに食べてやると決めた。なぜかこの抱負はずつと抱き続けることができて、やがて煮魚は、隠れた肉も箸先でほじくり出して食べ尽くし、焼き魚は、骨の硬い魚を除いて頭のみ残すに至った。これは今もそのまま、たまに居酒屋などで長角皿の隅に小さく畳んで置かれた骨とか、葉っぱとはじかみしか残っていないのを感じられることがあるが、その昔抱いた抱負の残滓なのだ。

さて今年の抱負をどう言ったものかと考え、今していることをどう発展させたいかを言えればいいか、と暮らしをなぞってみた。畑、ボランテア、塾、この三つでほぼ日々が回っている。はたと気がついた。どれ一つとつても、自分からやろうとしたことじゃない。誘われてやってみた面白かったものばかり。順番が来た。その時思っていたことを言った。「大事なことは人が決めてくれるので、今年もそんな感じになるようになるでしょう。」これは抱負だったろうか。

空き家 6

木幡智恵美

墓③

寄墓にして墓石は一つになりすつきりした。花ノ木も一対挿せばよいし、線香も一か所に立てればよい。かつてのように一人ひとりに墓石を建てていると、土地がいくらあっても足りなくなる。

娘がまだ独身だった頃、韓国に一緒に行ったことがある。その時、ガイドさんがバスの車窓からお腕を伏せたような形の小さな土の山を指して、「あれが、韓国のお墓です」と教えてくださった。イスラム教などのように、宗教によって土葬を基本とするところがある。韓国は儒教の関係なのか、明らかに土葬だと思われるぼっこりした墓だ。あんな大きな墓、よほど広い土地を持っていないと作れないだろうなと思いつつ眺めていた。

うちも祖母までが土葬で、父や母は火葬になった。初めて火葬に立ち会い、父の棺桶が火葬炉に入れられた時のことは忘れられない。火を入れるボタンを押した途端、泣き崩れてしまった。火葬というのは、生前の姿が全く違ったものになってしまうという残酷さがある。それが一区切りになるといふ点からは、生と死の境を明らかにしてくれるのかもしれない。

わが国では、まだ土葬が可能なところがあるようだが、許可が要るそうだ。九十九点九七パーセントが火葬だという。土饅頭型の墓だった韓国も、今では火葬が多くなり、土地の有効活用のために樹木葬にしたり、納骨堂に収めたりロッカーのようなところに納骨したりということが増えてきているようだ。時々新聞に樹木葬を行っているという寺のチラシが入っている。そういうのを見ると、墓についてのこれからの否応なく考えさせられる。

強い思いで寄墓を作り、四十年近い間、盆や彼岸だけではなく、母の日や命日にお参りしてきた。実家の墓だけでなく、伯父や伯母の墓参りも加わり余計大変になったこともあるが、私たちが居なくなつた後、誰が掃除し、お参りするかどうか。寄墓に入った最後が母だ。その母を知る者は、我が家では私以外夫と娘だけだ。娘も、自分の家族を持つてからはほんの数えるほどしか墓に参っていない。

30代フリーター 去年、こんな記事を見た。

「『年収が多くても暮らしに余裕な
んかない。優遇措置が多い非課税世帯は
ずるい』』『本当の弱者は男性、守られる
立場の女性がうらやましい』……。世間
的には『勝ち組』とされる人が自ら弱さ
をさらけ出し、時には他の弱者を攻撃す
る『弱者争い』のような状況がSNSな
どで起こっている」(2023年11月2
日朝日新聞デジタル)

年金生活者 弱いことはダメなこと、
恥ずかしいことだというイデオロギー
を推進力としてきた資本主義が、多数
の弱者を養えるほど膨大な富を生み出
すまでに発展した結果、かつて切り捨
てられていた弱者が権利の主体として
社会に公認され、弱さはダメなことでは
なく、ときには武器になるとさえ考
えられるようになった。それが弱さを
競う現象に結びついたと考えることが
できる。

30代 資本主義以前には弱さがダメな
ことは考えられていなかったという
年金 だが、北風も太陽もともに力を
使って旅人の外套を剥ぎ取ろうとした
ことに変わりはない。悪く言えば、一
方は風の力を、他方は熱の力を使って
旅人を拷問にかけた。

その結果、旅人は北風に対しては、
外套を飛ばされまいと必死で押さえ続
け、太陽に対しては、暑さに耐えきれ
ず外套を脱ぎ捨てるという行動に出
た。しかし、いずれも心を動かされた
結果ではなく、仕方なく体を動かした
だけだ。

もし旅人がそのとき、寒さに震える
子供に出会っていたら、外套を脱いで
その子に着せてやったかもしれない。
それは弱い子供に心を動かされたから
であり、強いだれかに強制された結果
ではない。人の体を動かす力は弱者よ
りも強者がまさっているが、人の心を
動かす力は強者よりも弱者がまさって
いることが多いと言える。

30代 その理由はどこにあるのか。
年金 人は弱者に遭遇したとき、そこ
に弱いおのれの分身を見て、庇護した

ことか。

年金 弱さをマイナスの価値と考える
イデオロギーが広まったのは近代に
なつてからだ。競争を駆動力とする資
本主義が労働力を互いに競い合う商品
にしてしまった結果、人間の生活が勝
ち負け、強弱の物差しに支配されるよ
うになった。

労働力の商品化は、第2次産業を牽
引車とする産業資本主義が利潤をあげ
るための必須の条件だった。労働者と
その家族は自らの労働力の安売り競争
の中に投げ込まれ、資本家に提供する
利潤をせつせと稼がされた。

やがて資本主義は第3次産業を牽引車
とするポスト産業資本主義の段階に移
り、インベーションを利潤の源泉とする
ようになる。労働力商品どうしの競争は
相対的にそのウェイトを低下させ、一般
の労働者はかつてほどは勝ち負け、強弱
を物差しとする生活を強いられなくなつ
た。高度化した資本主義は富の稀少性の
縮減を加速し、弱者の切り捨てを必ずし
も必要なこととはしなくなった。

くなる。もとはといえば、自分はその
分身と一体だったはずだ。なのに、い
まは互いに片割れを欠いた存在とな
り、その結果どちらも弱い存在になつ
てしまった。ふたたびひとつになれ
ば、その弱さを乗り越えられるかもしれ
ない。だが、それは現実にはかなわ
ないことだ。代わりに相手を庇護する
ことのできなわないところを埋め合わせ

30代 それはひとつの進歩だろう。

年金 もともと人類は弱さを力と考
え、恐れさえしてきた。それにくらべ
れば、ポリテイカル・コレクトネスに
もとづく現在の弱者の尊重など生ぬる
いと言える。人類学者のデヴィッド・
グレーバーと考古学者のデヴィッド・
ウエングロウの共著『万物の黎明 人類
史を根本からくつがえす』には、後期
旧石器時代の豪華な墓に、異常に背が
低かったり、逆にきわめて背が高かつ
たり、極度の猫背だったりする人びと
埋葬されていたことが紹介されてい
る。そうした「顕著なる身体の特異性
を示している」人たちが「階層的エ
リート」だったとは考えられない、と
著者たちは推定している。言い換えれ
ば、被葬者はマイノリティーであり、
社会的な弱者だったと想定される。
30代 力づくで人を動かそうとしても
逆効果だという教訓として読まれてい
るイソップ寓話の「北風と太陽」は、
強者が必ず勝つとは限らないことを
語っている。

るしかない。

そのモデルになつているのが母の在
り方だ。もとは一体だった我が子を自
身から引き離してこの世界に追いやつ
た母は、その代償として全面的な庇護
を子に与えようとする。子にそうさせ
る力や強さがあるのではない。子の無
力さ、弱さが母の心を動かす。おのれ
の弱さを差し出すこと、そこに生きる
ことの原点がある。

「自分自身については、弱さ以外に
は誇るつもりはありません」「むしろ
大いに喜んで自分の弱さを誇りましよ
う」「わたしは弱いときにこそ強い
からです」(パウロ、「コリント信徒へ
の手紙二」、『聖書新共同訳』)
30代 それを実行に移すのは難しいこ
とだ。

年金 先の大戦で一敗地にまみれた私
たちの国は、弱さを世界に差し出すこ
とによって、強さに代わる安全保障上
の抑止力を手にした。憲法9条はその
宣誓書にあたる。それが重ねてきた実
績を忘れるわけにはいかない。

ニュース日記 909
中村 礼治

弱さを差し出す